

「おい、ちょっとまってよ！ 何でイマなんだよ！なあ、〇〇君よお.....」

「えっ？」

□

その夜、僕たちはまたトランプに興じていた。

日本にいたときはほとんどトランプなどやったことはない。というかどちらかと言えば嫌いだった。子供の頃からゲームの類が苦手で、何度友達に教えてもらっても、将棋の駒の動かし方もわからなかった。

「その”あるく”はさあ....., なんだっけ？」

「”あるく”じゃないの。何回言ったらわかるんだよ。”歩”はね、”ふ”っていうの。ああ。だめだこりゃ。」

ましてトランプは正月に家族と”ババ抜き”ぐらいだ。”七並べ”はやり方はおぼえたけれど面白くもなんともない。

そんな僕が、その夜はカードを片手に、灰皿に吸殻の山を作っていた。

□

その年の夏、僕は TOURS にいた。

予定していた語学学校での在籍も、六月の末には学期末試験と共に終わっていて、新学期からは一応大学に行くことになっていた。

しかしその年、ちょっとした異変がおきた。大学に行くことを前提に、決められた手続きをし、決められたテストを受け、学生ビザを日本で取得した。その大学の前段階でフランス語の語学学校に通うことも最初から決まっていたスケジュールだった。

ところが半年ほど前、それが急に政府の政策か何かわからないけれど、大学に入学を希望する外国人留学生は、一部の例外を除いて全員もう一度フランスで試験を受け直すようにという通達があった。その結果によってどこの大学になるかが決定され、またその成績次第では大学への入学は認めない、そんなことになってしまった。

大学に行くことにさしてこだわりのなかった僕は、「別にいっか。」とは思ってはみたものの、やはりなんか気持ちが悪い。

突然の手紙一枚。今日はカレーだよと朝出掛けに言われて、ほとんど頭の中がカレーで爆発しそうになりながら空腹の状態で家に帰ると、

「今日ね、カレーは無理なの。時間もあまりないしねえ。何にしようか、夕飯。今考えるからちょっと待っててね。」

「な～んで？今からカレー作ればいいじゃん。なんでダメなのか、ボクわからな～い...」そんな状況に似ていた。 キモチワルイ。それがその時の心境だった。

もうちょっとで9月だというのに、結果の知らせは一向に届かなかった。

早くどこに行くか知りたかった。北なのか南なのか皆目わからない。動きようがなかった。

第一希望から第三希望まで、大学は選ぶことになっていた。

何が問題かという住まいだった。地方都市ならまだしも、もしパリにでもなってしまうたら、どうしよう。パリで手ごろな部屋を見つける事の難しさはもちろん知っていたから、毎日憂鬱だった。

9月は目の前。ああ、パリは希望地にいれなきゃよかったと、いまさらながら後悔した。荷物なんてたいしてありゃしない。問題は住处なのだ。

□

試験は、よく晴れた春の終わりに行われた。TOURSの学生はオルレアンが試験会場だった。

すごい数の学生が集まっていた。その年、フランス中に中東の○○○人学生が押し寄せていた。革命の後、アメリカに行けなくなったからだと、誰かが言っていたが、本当のところは知らない。TOURSもその例にもれず、多くの○○○人で溢れていた。クラスの半分以上を占めていた。

彼らはとにかくよくしゃべる。思いついたことはすぐに声に出す。それでなくてもおとなしい日本人は、授業中話に割り込むことは至難の業だった。

その日、オルレアンにも彼らのほとんどが来ていた。仲のよかったムハメドもその中にいた。

「どうだった？うまくできたか？」

「ゼンゼン」と僕。

「オレはカンペキだったぜ。」

「.....」

「オレは6月には語学のディプロムとって、大学に入ったらなあ、ああ大学はパリだぞ。そんでなあ...応用化学をやるんだ。そんでな、ドクターまでやってな、そうだ、もちろん国家博士号もとってな、そのあとどっかのグランゼコールに行っちゃたりしてさ、そんでもって、ちょっといっちゃまえの研究者になってなあ、そんでもって.....」
話は止まらなかった。ムハメドはいい奴だ。だがいつもこんな調子だった。

この国の○○○人社会は、二つのグループに分かれているような気がしていたから、以前食事に呼ばれてムハメドの家に遊びに行った時、聞いててみた事がある。

「それはなあ...」とそこまで言うと、となりの○○○人友達と母国語で話し始め、結局のところ僕にはわからずじまいだった。

とにかく試験の後は、何かお祭りの引けた後のように、オルレアンの駅まで人の流れが続いていた。

そんななか TOURS から来ていた日本人のひとりが、ご立腹だった。

「なんでこんなところにこなきゃいけないんだよ。まったくさあ。どうなってんだよ。それになんなんだよ。こんなにうじゃうじゃいてさあ。」

話しをしたことなどないけれど、○銀から派遣されて来ていると聞いたことがある。きっとプライドが許さないのだろう、僕たちのような者と一緒にされるのが。みみっちいプライドだ。いつかこの銀行は破綻するかも知れないと僕はひそかに憂いだ。

□

暇だった。とにかくすることがない。毎日郵便受けを覗き込むことが日課だった。

仲のよい日本人仲間のなかでカツヤさんのうちが一番広かった。僕たちは自然に夜な夜なカツヤさんちに集まるようになった。僕以外、みんな昼間は夏期講習を受けていた。

カツヤさんは一流メーカーの社員だけれど、企業組とは距離を置き、気のあった人間としか付き合わない。好き嫌いが激しい。嫌いな人とは口も聞かなくなる。感性の豊かな人で、映画や音楽、絵画にも精通していた。僕たちと付き合ってもいつもちゃんと割り勘だ。そんなところも僕は好きだった。相手の本当のプライドが理解できる”大人”だった。

カツヤさんとはよくバカな話で盛り上がり、よく朝まで遊んでいた。その最たるものが”悪食ゴッコ”だった。

「ウニにヨーグルトをまぜてさあ、ケッチャップかけてご飯にのせて た～べれる？」
「オレ それダメ」
「いやまてよ。しょうゆを足せば少しは食べれるかも……」
「じゃあ、ご飯にキナコかけて、イチゴジャムとかつぶしを練ったものをのせて、牛乳かけてはどう～だ？」
「う～ん。ダメかもしれない。」
「案外食えるんじゃないかなあ……」
「えっ？ホントに？うっそだ～。やってみるか……」
こんなことを朝までやって笑い転げていた。

ある晩、いつものようにバカ話に花を咲かせていると、カツヤさんが、ニタツとして言い出した。

「ねえ、みんなでトランプやらない？僕持ってきてるんだけどさあ。やろうよ。ね、ね、楽しいよきっと。」
突然の提案だった。僕以外の二人は「うん。いいね。」と言わんばかりにうなずいた。

「あのさ、僕トランプよく知らないんだけど。」
「だいじよぶ。だいじよぶ。教えてあげるからさ。」
「それにさあ、あんまりこういうの好きじゃないんだけどさあ。」
「だいじよぶ。だいじよぶ。すぐ好きになるからね。」
「だってさあ……」
「はい決まり。決まり。やることに決定！ だいじよぶ。だいじよぶ。すぐおぼえるからさあ。」

□

最初はポーカーだった。

カツヤ宅に着くと決まって、カツヤさんは、またニタッと嬉しそうな顔をして、もうカードを切りながら僕たちを部屋に通す。

確かに”だいじょぶ”ではあった。ゲーム嫌いの僕がポーカーをやっている……。

数日たつとポーカーはセブンブリッジにかわった。
だんだん”だいじょぶ”ではなくなりつつあった。が、ただただ毎日、通知待ちの僕は、何かに熱中していたかった。

□

「おい、ちょっとまてよ、勘弁してよ、〇〇君さあ、なんでこのタイミングなのよ。やってらんねえよなあ。」

その日はセブンブリッジにも飽き、カツヤさんが”ナポレオン”をやろうと言いだした。
”ナポレオン?”なんだそれ。

「だいじょぶ。だいじょぶ。教えてあげるから、ね。ポーカーだってセブンブリッジだってできるようになったじゃないの。」

難しかった。何度聞いてもよくわからない。やってくうちにわかるからと、しぶしぶ始める。まあなんとかそれなりに、何ゲームかやっていくうちに、少し要領がつかめてはきた。

そんな時だった。「おい、ちょっとまてよ……」が始まったのが。

声の主は板さんだった。もちろん本名はちゃんとある、料理人で、今はフランス料理の勉強に来ている。みんなから”板さん”と呼ばれていた。

もともとROYANの学校にいて、なんでもパリにでも行こうかと車を走らせていたところ、TOURSの近郊でたまたま車が故障し、そんなこともあってこの町にそのまま居つくようになったらしい。この板さんの車には随分とみな世話になっている。ある夜、誰かが、

「お城見に行こうよ。これからさあ。きつときれいだぜ。なあ、どうかな。」と言うと、「わかった。」と言って、板さんが車をだしてくれた。”眠れる森の美女”で有名なその城に行くと、果して真っ暗で何も見えなかった。

「明かりがあればなあ…」

「そうだ。クルマ、クルマがあるじゃないの。」

「えっ」

「だからさあ、クルマにはヘッドライトあるでしょうが。つまりさー..」
「つまりさーって、つまり、クルマで照らすわけ？」
「ピンポーン！正解！」
「バカっつーの。」

人のよい板さんは、その会話を聞き、だまって自分の車を、城の正面に通じる細い道に移してくれた。

「ダメだ。上まで明かりが届かない。」
「ライト、上向きにしてみたら？」
「うん。やってみるか。」

「やっぱりだめじゃん。無理だっつうの。」
「いや、まてよ.....おいみんな いっせいのせいでさあ...」
「なにッ、なにってんのばかばかしい。持ち上げるってわけ？」

結果は無残だった。やおらみんなで板さんのクルマの前半分を持ち上げて、そのライトを城に向けた。見えるわけがなかった。

板さんはそのやさしい人柄も手伝って、みんなに好かれていた。僕にもよく日本風のおいしいポテトコロッケなんか作ってくれたりした。うまかった。

そんな板さんがイマ、オコッテイル。

「だからね。もう一度言うけどさ。〇〇君、いまじゃないの、これを出すのは！」

”ナポレオン”には副官というのがいて、だれが副官かはわからない。ゲームをやっていくうちにわかるらしい。その時、僕は板さんの副官になっていた。そこで、なれない僕はいいカードを少しばかりタイミングをはずして出してしまったらしい。

日頃は温厚な板さんだが、こと勝負事となるとすぐ熱くなる。目が血走っている。

「えッ？ ああすみません。ごめんなさーい。」

最初はやめた。
しかし何度も言われると、だんだん僕も腹が立ってきた。

「あのさあ。たかだかさあ。トランプでさあ。なんで怒るわけ。いいじゃん、こっちはよくわかってないんだしさあ。またやれば.....」

「そういうもんじゃないの。勝負ってもんは。ちゃんと考えてやってくれよなあ。〇〇君よう。」

少し陰悪な雰囲気になってきた、その時、その場をとりもつように、三郎さんが割って入った。

「まあ、まあ.....。あのな...」

三郎さんは大阪。メガネをかけ、学者然としているが、そのフランスに来た理由がシャレていた。ただただおいしいものを食べるためにやってきたのだ。この町で学校に通い、時たまフラッといなくなる。どこかの町のどこかのレストランへ何か食べに行っていたのだ。その人生の選択の、この割りきりが僕は大好きだった。親切で心の温かい、人情味のある人だった。

「あのな、、その”切り札”って、フランス語でどない言うか知ってはる？ 知らんやろなあ、みんな、」 三郎さんは博学だった。何か解らないことがあるといつも図書館で調べものをしていた。

「知らんやろ。 おもしろいで。教えてろか。教えてるで、、”ATOUT”言うねん。わかる？ ”ATOUT”！や。」
「.....」

「しかし、なんで”ATOUT”言うんやろなあ。 わからへんなあ。 不思議やなあ。 TOUTはあのTOUTやろ、それにAがついとる。どないなってんやろ。ひとつ調べたろか。」
三郎さんの探究心が始まった。

「ふ～ん。 そう言うの。」
「へえ。」

なんだかみんな意味もなく関心していた。 そのとき突然、またドスのきいた声が出た。

「だからさ！ ○○君！！ その”ATOUT”がさあ、 は・や・す・ぎ・る・の！！」
板さんはまだ怒っていた。

□

その日以来、カツヤさんのアパートにはこんなセリフが飛びかうようになった。

「オレはBRELANだ。ざまーみろ。」
「うっふっふっ。 FULLよFULL. 僕の勝ち」
「CARREやねん。 CARRE！ ほんまおどろいたわ。 こんなんはじめてやわ。」

ただし”ナポレオン”はもうしない。

□

TOURSを去る日が来た。僕はパリに行くことになった。

その朝、ロワール川のほとりに僕はいた。
世話になった恩師に挨拶に行くと言った感じで、少しあらたまった気持ちで来ていた。

朝日が反射するそのゆったりとした流れは、僕をしばらくの間そこに留まらせた。

* すべてフィクションです。登場人物に似た者がいたとしてもそれは全くの偶然です。そして社会情勢に関する記述等事実と反していても架空のものであることで了解されたい。